R8.2.7

ティーチプログラムとABA(応用行動分析)について

地域生活支援センター風の輪
所長　加藤啓一郎

1．行動援護従事者養成研修におけるティーチプログラム、ABA(応用行動分析)の位置づけ

- 行動援護従事者養成研修(強度行動障害支援者養成研修　基礎・実践研修)は行動障害のある人に関わる専門的な支援者を養成する講座で、その受講が行動援護サービスや重度障害者加算の要件となっている。
- その講座の中で、支援方針の基本的な考え方としてティーチプログラムとABA(応用行動分析)が取り上げられている。
- 両者ともに、心理学の方法を用いた療育法であるが、心理学会で他の治療法に比べこの2つの治療法が有効である、といった結論は出されていない。そのような保障がない中で、日本の障害者福祉の分野においては、ティーチプログラムとABAの考え方を元にして養成講座が組み立てられているのが現状である。
- このことについては、国に対して意見表明する必要があると考えられるが、それはさて置き本稿では、ティーチプログラム、ABA に対して関係論的な視点を比較しながら、ティーチプログラム、ABA を偏重することの問題点を明確にしていく。

2．関係論的な視点について

- 特定の養育者との関係形成は、人としての成長や学習にとって必要不可欠な要因である。
- 生後1年の時期の基本的信頼関係が形成される過程を名倉啓太郎は以下の4つの時期に分けた。
  ① ひと−ものが未分化で、特定の人との関係が成立していない段階　生理的安定　(0:0～0:1m)
  ② ひと−ものが分化してくるが、特定の人との関係は成立していない段階　慣れた場、自体循環的活動による安定　(0:1～0:4m)
  ③ 特定の人との関係が芽生える段階　行動の安定系としての人の成立(0:4～0:8m)
    - **特定の養育者が安定の軸となる**
  ④ 特定の人との関係が強まり、安定する段階　模倣と「対象」の成立(0:8m～)
    - **特定の養育者を通しての学習の成立(社会的学習、模倣の増加、三項関係の成立)**
      - 親が太鼓を叩くと子も真似て叩く、などものを用いた模倣が増加するが、この模倣は、模倣というよりは、母子未分化な中で、同じ行動をすることによって一体性を強めるような行動と考えられる。同様に三項関係と言っても、子ども、養育者が分化した中でのものとの三項の関係を形成するということではなく、行動面で言うと、親だけを見たり、ものだけを見たりするのではなく、親を注視したり、ものを注視したりといった行動が人とものを関連付けて見ていると了解できるような行動をさす(例;おもちゃを見てさわろうとするが、触る前に視線を移し親を見る→おもちゃに触っていいか親に確認している、と理解される)。
    - **コミュニケーションの進展(三項関係をベースにした要求表現)**
      - 外へ出たいときに靴を持ってきて親に訴える、ミルクが飲みたくて冷蔵庫を叩いて親に知らせるなど、ものが入ることによって要求の内容が分かりやすくなる。
      - 8か月のまなざし行動(積み木が積めて、にこにこしながら親を見る、びっくり箱に驚き、親を見る、さわっちゃだめ、と言われると親を見る、などまなざしが一定の意味を担ったコミュニケーションに使われる)
    - **自己肯定感、自己効力感の基礎が形成される**
- 基本的信頼関係が形成される以前の時期、乳児は外界からのストレスに対して身を守る手段として以下

の二つのシステムを持っている。

① 人刺激による安定のシステム(生得的に備わった安定のシステムから発展したもの)

- 抱くと泣き止む
- →母親の声を聴くと、姿を見ると泣き止む、又は泣き出す

② 自分自身の心理機能を用いて安定するシステム(⇔こだわり)

- 知覚機能(見慣れること、聞きなれることで緊張を低減)→自閉児の同一性保持と類似
- 運動機能(動くことで緊張を解放)→自閉児の常同行動と類似
- 感情機能(泣く、笑うことで緊張を解放)⇔共感の基礎

- この時期の後、「自分自身の心理機能を用いて安定するシステム」は徐々に使われなくなり、人との関係による安定が中心となる。
- 健常乳児と自閉児との類似性は両者ともに基本的信頼関係が形成される以前の段階にあるということであり、外界からの刺激に対する防衛機制として類似した機制が用いられるものと思われる。

3. ティーチプログラムについて

- ティーチプログラムとは、ノースカロライナ州立大学で発展した、自閉症スペクトラムのある人々及びその家族を対象とした包括的なプログラムで、その方法の中心にあるのが「構造化」という考え方である。
- 構造化とは、「周囲の環境やかかわり方をより視覚的・具体的に明瞭にし、系統的に整理することで、世の中の状況を自閉スペクトラム症の人に分かりやすく伝える取り組み」であり、ことばの理解が難しい人でも見通しを持って安心して活動できるようになることを目指す。

4. ティーチプログラムの長所と問題点

- 自閉児の特徴として、基本的信頼関係が十分に形成されていないことが挙げられるが、この段階の自閉児は特定の養育者との関係によって安定することが難しいため、環境面の構造化によって、その場が安心できて見通しのある状況になることによって、落ち着いて行動することができる。即ち、ティーチプログラムの構造化がある程度有効であると言える。しかし、健常乳児の発達と比較して考えれば、自閉児の場合でも、場による安定から、人との関係による安定へと移行していくことが普通に考えられるが、ティーチプログラムにはこの考え方が見当たらない。対人関係の問題が一生変わらず、構造化に依存する状況が生涯に渡り継続すると考えるのである。このことから、ティーチプログラムの有効性は部分的である、ということができる。
- 第二点として、行動援護従事者養成研修のテキストの中で、ティーチプログラムを肯定している人たちが述べていたことであるが、ティーチプログラムは環境設定を中心に置いた手法で、構造化は「受容性のコミュニケーション」であり、双方向のコミュニケーションになっていない。即ち、構造化しただけではコミュニケーションが成立しているとは言えない。これらのことから、双方向のコミュニケーションを通して、積極的に問題を解決する手段としては不十分な点があると考えられる。これらの点を認識して、テキストでは行動の背景を理解する方法として、「氷山モデル」(問題行動の背景にある要因を明確にする方法)が用いられているものと思われる。

5. ABA(応用行動分析)について

- 応用行動分析(ABA)とは、スキナー(B.F. Skinner)が創始した行動分析学を基盤とし、オペラント条件づけの原理(望ましい行動は強化され、そうでない行動は弱まる)を用いて、発達障害支援、教育、医療、企業など多様な分野で望ましい行動を増やし、望ましくない行動を減らすための手法・体系。ABA は、行動の先行事象(A)→行動(B)→結果(C)という関係(ABC 分析)を分析し、環境を操作することで行動の改善を図り、特に自閉症スペクトラム(ASD)の療育で広く用いられている。

6. B.F. Skinner について

- **B.F.スキナーは新行動主義を代表する心理学者で、ワトソンの行動主義を発展させ、「<u>オペラント条件づけ</u>(道具的条件づけ)」を提唱した。彼は、行動の後に続く「強化(報酬)」によって行動が繰り返されるかどうかが決まると考え、「スキナー箱」などの実験装置を用いて、行動の予測と制御を試み、プログラム学習などの教育への応用も行った。**
- **スキナーの新行動主義の主な特徴**
  - **① オペラント条件づけ: 刺激と反応だけでなく、その後の結果(強化子)に注目し、自発的な行動とその結果の関係を分析。良い結果(強化)が伴えば行動は増加し、悪い結果(罰)なら減少すると考えた。**
  - **② 環境決定論: 自由意志は幻想であり、人間の行動は過去の行動結果(強化の歴史)によって決定されるとした。行動をコントロールする環境要因を探求した。**
  - **③ 徹底的行動主義: 意識や心も行動の一種として捉え、目に見える行動と同じ原理(オペラント条件づけ)で説明できると考えた。**
  - **④ 実験的手法: 「スキナー箱」や「速度累積記録計」を用いて、行動の強化子と応答速度の関係を客観的に測定し、行動の法則性を探求した。**
  - **⑤ 教育への応用: プログラム学習(段階的に学習内容を提示し、正答ごとに強化する学習法)を提唱し、教育分野に大きな影響を与えた。**

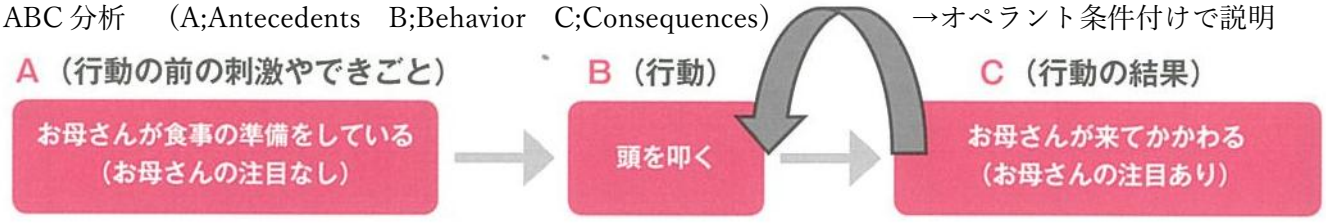
7. ABA(応用行動分析)の問題点について

- 行動科学の客観主義パラダイムは対人援助の分野にはそぐわない。
  - 鯨岡(2017)で詳しく述べられているように、ABA を代表とするエビデンス主義や客観主義では、対人関係の領域の(行動としては)目に見えにくい心の動きは、それがどれほど大切なものであっても、対象外の事柄になってしまう。我々の日常生活の中で普通に交わされる心と心の間のやり取りを取り上げることは難しい。「接面」というパラダイムを用いて初めて心のやり取りを取り上げることができる(その具体的な方法がエピソード記述である)。
- 応用行動分析の考え方と意思決定支援は矛盾する
  - 応用行動分析はスキナーの行動分析学、オペラント条件付けの考え方をベースにしているが、スキナーの考え方自体が、行動主義が始まった当初の極端な環境説ではないにしても、環境要因によって行動が決定される、若しくはコントロールされると考えており、本人の意思を尊重して支援する、主体の要因によって環境要因が変化するという考え方と整合性が取りにくい。
  - 利用者の主体性の尊重、支援者の主体性、相互主体性といった概念が応用行動分析の中でどのように位置づけられるのか、疑問である。

8. 行動援護従事者研修のテキストの中で出てくる例

- 何故困った問題が生じるのか

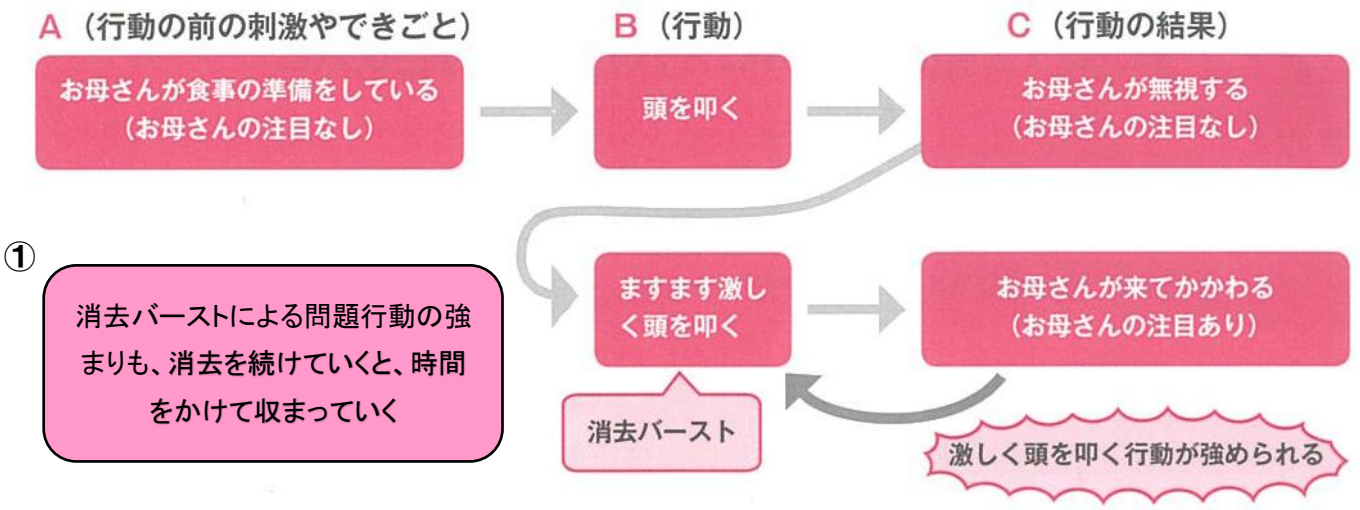
ABC 分析　(A;Antecedents　B;Behavior　C;Consequences)　→オペラント条件付けで説明

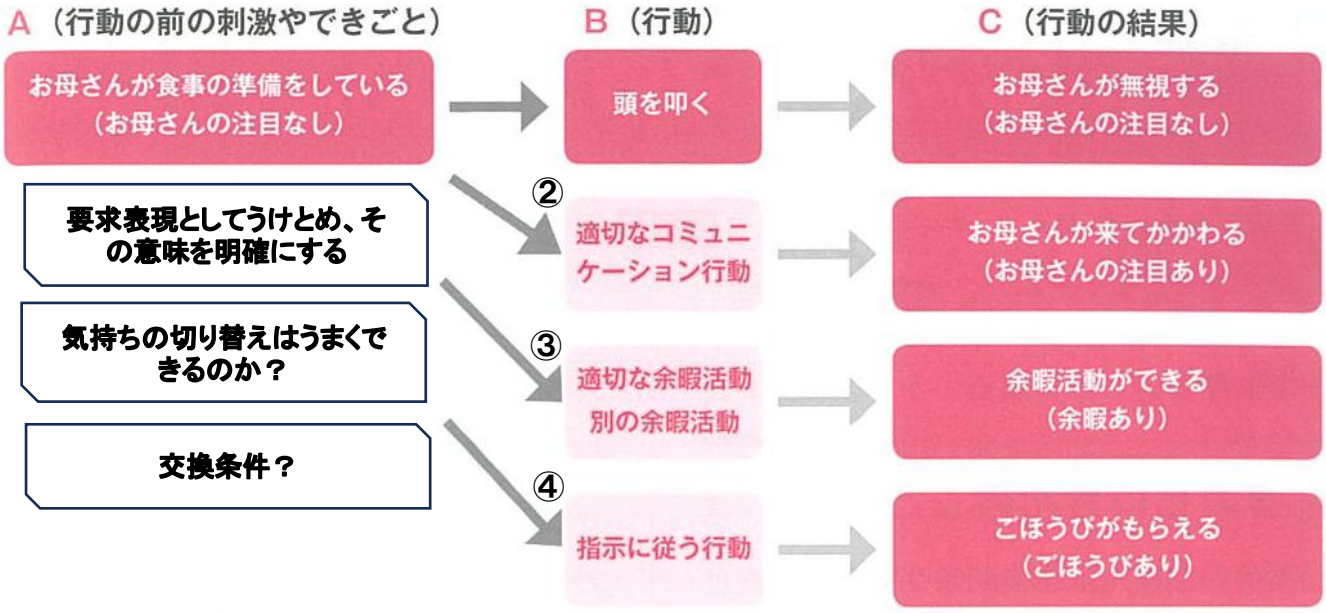


- 行動の前の刺激や出来事(先行刺激)→ **弁別刺激**
- 行動を強める操作→(頭を叩く) **オペラント行動**
- 行動の結果→強化子(母親の注目) **強化刺激**
- **三項随伴性(先行刺激、オペラント行動、結果という 3 つの要素が連鎖する関係性)**
- 強化を停止すること→消去　最初の段階で行動がより増加→消去バースト(消去抵抗)

- 応用行動分析による解決法(①～④)と疑問点

ジロウさん
お母さんはジロウさんの自分の頭を叩くという行動の強化子が自分の注目であるということが分かりました。お母さんはジロウさんの自傷行動をやめてほしくて、自傷行動をしても注目しないようにしました。しかしジロウさんの自傷行動はますます強くなっていき、大きな声と頭を叩く音は、ますます響き渡ります。お母さんは耐えられなくなり、声をかけてしまいました。このような消去手続きを何度か試みましたが、その都度失敗してしまいました。するとそれ以来、自傷行為は以前に増して、ひどくなってきたようです。





心のやり取りの問題を抜きにして、問題行動の解決法だけが模索されている
子どもとお母さんの気持ちが整理されたかどうかが大切なのでは？

（その他の疑問点）

- 作業の提供；終わりが分かれば混乱しない、ということで、見通しを持たせた構造化が提案されるが、作業をすることが前提で、そもそも作業するかどうかの意思決定は問題にされない。作業したくない気持ちの中に本人自身の切実な訴えがあるかもしれない。
- どうしたら混乱せずにおもちゃ屋(見たら入ってしまう)の横にあるドラッグストアへ誘導できるか、といった課題が演習で議論されるが、そのような環境設定を行う必要性があるのかどうか。本人がドラッグストアへ行きたければ、他の店を探せばいいだけの話ではないか。

9．新行動主義の学習理論で人の成長発達のすべてを説明することにはかなりな無理がある

- ピアジェの発達段階
  ① 感覚運動期　（外の世界は考える対象というより、直接身体的、感情的、行動的反応を引き起こす刺激に対する反応の体系として捉えられるようになる）
  ② 表象期　表象形成(イメージの喚起)
  ③ 具体的操作期　論理的思考
  ④ 形式的操作期　抽象的思考　知識の対象として外界が存在し、対象世界について思考することが、外界への働きかけの重要な手段となる
- 言葉の理解→ピアジェによれば子どもは、刺激に対して身体的、感情的に反応している段階から表象形成を経て、知識の体系として外界を把握し、言葉を用いて論理的、抽象的に思考できる段階へと発展していく。
- 新行動主義の人たちはこれらの言葉の発達を模倣学習とオペラント行動で説明しようとするが、かなり無理がある。説明できるとしても、感覚運動期(0～2 歳)の一部に限られると思われる。
  - 赤いふた(弁別刺激)を取ると(オペラント行動)、お菓子(強化刺激)があった
  - 遊んでほしい時(母親が家事を終えた、などが弁別刺激)、ボールを持ってくる(オペラント行動)→ボールを投げてもらえる(強化刺激)
  - 「ちょうだい」をすると(オペラント行動)、ものがもらえる(強化刺激)　弁別刺激は母親の姿など。
  - 「お座り」と言うと(弁別刺激)、座って待つ(オペラント行動)　御飯がもらえる(強化刺激)→**ことばの理解**
  - 「まんま」と乳児が言うと(オペラント行動)、御飯がもらえる(強化刺激)　弁別刺激は母親の様子若しくは、お腹がすいた、という乳児自身の感覚**→発語**
  - イメージの喚起ができない(表象期以前)一歳前後の初語の時期のことばの理解や発語の説明には一部使えるかもしれない。しかし、小学校以降の教育課程で私たちが知識を習得した過程を振り返っても、抽象的な知識の体系の学習まで説明することは難しいと考えられる。
  - 又、子どもは養育者との絆が深まるほど、養育者のことばや行動への関心が増し、養育者との関係をベースにして興味が広がっていく。そのことが結果として言葉の発達に影響を与えるのであり、単にその内容に応じた強化子を得られることでオペラント行動としての発話が広がっていくとは考えにくい。